詩心と崇高な人物

森　　豪

The Poetic Mind and the Sublime Figures

Tsuyoshi MORI

Those who have the poetic minds, can "have an under-sense of greatest among least things, and see the parts as parts, but with a feeling of the whole." Those minds are not restricted to poets. Wordsworth's sublime figures have them. The types of those figures are Michael and a Leech-gatherer. Michael has two aspects. The first one is that he is outwardly sublime, and the second is that he is a mortal being. He meets with a misfortune, but he is not overwhelmed by it. It is made possible by his poetic mind that he keeps working in spite of his unhappiness. And we can find him sublime. The Leech-gatherer has only the same aspect as Michael's second aspect. He is not outwardly sublime, but he is sublime because we can feel immortality through his mortality like Wordsworth. Wordsworth's consciousness of his own mortality makes him appreciate the Leech-gatherer's sublimity. The poetic mind is most active, when he who has the poetic mind, appreciates his own mortality. It can be seen in King Lear, too. The poetic mind has the deep relation with mortality, and sublimity appears most conspicuous, when the poetic mind transforms mortality into immortality with a sublime consciousness of the soul's immortality.

I

本稿の目的は，ワーズワスの崇高な人物に於ける「詩心」の働きについて，シェイクスピアの Lear 王に言及しながら考察することである。ここにいう「詩心」とは詩人に限定されるものではなく，*The Prelude* の次の箇所に述べられた心の働きのことである。

> But though the picture weary out the eye,
> By nature an unmanageable sight,
> It is not wholly so to him who looks
> In steadiness, who hath among least things
> An under-sense of greatest ; sees the parts
> As parts, but with a feeling of the whole.
> (*The Prelude*, Ⅶ, 702-712)

この詩行は，ワーズワスのロンドンに於ける体験についての描写の一部である。詩人はロンドンを「空疎な混乱」("blank confusion!")(l. 695)と呼んだ。ロンドンの人々は，「法則("law")もなく，意味("meaning")もなく，目的("end")もない様々なものによって一様なもの("one identity")に還元されている」(ll. 702-703)のである。「気高い精神の持主」("highest minds")(l. 705)もその状況下で苦しみ，「強力な精神の持主」("the strongest")(l. 706)も自由ではない。ところが，「詩心」を持つ人間にとって，「卑小なるものに崇高なるものの潜在感を持ち，部分を部分として，しかも全体感をもって見る」("who hath among least things / An under-sense of greatest ; sees the parts / As parts, but with a feeling of the whole")人間にとって，状況は異なったものになる。「混乱の光景が目を，本来調整のきかない視力を疲れさせても」("though the picture weary out the eye,/ By nature an unmanageable sight")，「詩心」を持つ人間はその影響をそのまま受けないのである。視点を転換して価値の転換をはかり，混乱の中に秩序を見出すのである。

現にその「詩心」を持つワーズワスは，混乱の都会の中で，「自然の霊」("the Spirit of Nature")や「美の魂」("the Soul of Beauty")を見出している。

> This did I feel in that vast receptacle.
> The Spirit of Nature was upon me here ;
> The Soul of Beauty and enduring life
> Was present as a habit, and diffused,
> Through meagre lines and colour, and the press
> Of self-destroying, transitory things
> Composure and ennobling Harmony.

(*The Prelude*, VII, 734-740)

「詩心」のない人間にとっては,「貧弱な色彩や形態」("meagre lines and colour")と「押し寄せてくる自滅的で,束の間のもの」("the press of self-destroying, transitory things")はそれ以上のものになりえず,そこに「自然の霊」と「美の魂」を見出すことはできない。「自然の霊」や「美の魂」を見出すのは「詩心」である。最初の引用と比較すれば,「貧弱な色彩や形態」と「束の間のもの」は「卑小なるもの」と「部分」に相当し,「自然の霊」と「美の魂」は「崇高なるもの」と「全体」に相当する。

ここで注意しておきたい点が二点ある。第一点は詩人の基本的視点が,「部分を部分として」見つめ,そこに「全体」を「潜在感」として感じるところにあるということである。重要なのは,詩人は「部分」を「部分」としてよく見つめるということである。都会で見出される「自然」や「美」は,都会の「束の間のもの」が「束の間のもの」としてよく見つめられるうちに,「潜在感」として感じられるものである。「霊」と「魂」を「感じた」という表現の持つ一つの意味はそこにある。このような詩人の見方は,後に述べるSatanや天使と違う人間の持つmortality(必滅性)という性質と深く関わっている。人間は神でもなく,Satanや天使でもない。「部分」に「全体」を認識する方法は,変質とも言い換えうる,「潜在感」として感じる方法以外にないのである。

第二点は,「卑小なるもの」に「崇高なるもの」を感じ,「束の間のもの」に「美の魂」を感じたことに関するものである。引用した詩行によれば,崇高と美は,「部分」に「全体」を見出す「詩心」によって認識され,崇高と美の間に違いがないかのように思われる。ワーズワスがそのような印象を強めるかのように,「同一対象が崇高にも美にもなりうる」[2]("the same object may be both sublime & beautiful")と述べていることも事実である。しかし彼は,崇高は「心の高揚と畏怖の念」("the exaltation or awe")をもたらし,美は「愛とやさしさ」("love & gentleness")を生じさせると述べ,崇高や美に伴う感情は全く対立的であると考えている[3]。同一対象が崇高にも美にもなり,共に「全体」に関わったところに成立するものであるが,崇高と美には違いがある。その違いは,崇高によってもたらされる「高揚と畏怖」に潜む恐怖感に関係している。都会での「美の魂」の発見に於て,「美」が発見される対象は「貧弱な色彩や形態」であり,「自滅的で,束の間のもの」であり,詩人に恐怖を与えるようなものではない。崇高は,恐怖を生じさせる自我の危機と関わりがある。"Immortality Ode"の末尾の「涙に余る深い思いを与える卑小な花」("the meanest flower that blows can give / Thoughts that do often lie too deep for tears.")(ll. 206-207)は,本来,美の対象に相応しいのであるが,"Ode" 自体が詩人の自我の危機(mortalityから生じる)をうたい,その危機をのりこえた思いの託された花だけに崇高なのである。

以上の二点に共通しているのは,temporalな性質である。「部分」を「部分」として見つめるとは,その性質を見つめることである。そして見つめる者もmortalityというtemporalな性質を持っている。「詩心」の働きは,このような互いにtemporalな性質を持つものの間に成立するものである。本稿では,人間の持つtemporalな性質であるmortalityと「詩心」の関係を中心に考察するつもりである。

II

「卑小なるもの」の中に「崇高なるもの」を見出すには,なんらかの「崇高なるもの」についてのイメージが必要である。そのイメージがあるために「卑小なるもの」に出会ってもそこにイメージを重ね合わせ,「卑小なるもの」は「崇高なるもの」に変質するのである。ワーズワスの崇高な人物にもその原型となるものがあるが,それについて考察する前に,彼の崇高な自然の原型について述べておきたい。

彼の崇高な自然のイメージの原型は,彼の故郷の山々である。そして彼は故郷の山々の自然によって「詩心」を育まれている。

By influence habitual to the mind
—The mountain's outline and its steady form
Gives a pure grandeur, and its presence shapes
The measure and the prospect of the soul
To majesty ; such virtue have the forms
Perennial of the ancient hills ; nor less
The changeful language of their countenances
Gives movement to the thoughts, and multitudes,
With order and relation.

(*The Prelude*, VII, 721-729)

ここで彼は「古びた山々("ancient hills")の永遠の("perennial")姿が持つ効力("virtue")」について述べているが,崇高な自然についてのイメージを「山々の輪郭とその堅固な姿」("the mountain's outline and its steady form")から得たことが分る。そして大切なことは,対象の崇高を理解するためには,主体自身の魂も崇高でなければならないということである。詩人は,自然

によって彼の「魂の尺度と視野」(“the measure and the prospect of the soul”)が崇高になり，抱く思いに「秩序と関連」(“order and relation”)が生まれるようになったと述べている。この山々の崇高な姿と崇高な魂が彼の「詩心」の土台である。

ワーズワスの “The Simplon Pass” は，この崇高な自然についてのイメージと「詩心」の働きによって成立した詩である。ワーズワスは，1820年にかって訪れたシムプロン峠を再訪している。その時の峠の風景を同伴した妹の Dorothy が描いているが，その風景は「混沌と荒廃」(“chaos and desolation”)の風景であったようだ[4]。最初の訪問後すぐに，1890年 9 月 6 日の妹宛の手紙でワーズワスは，「混沌と荒廃」の風景について，“I had not a thought of man, or a single created being ; my whole soul was turned to him who produced the terrible majesty before me.” [5]と述べている。1899年に書かれた “The Simplon Pass” に於てこの風景は，「一つの精神の働き」(“workings of one mind”)(l. 16)，「永遠の典型と象徴」(“the types and symbols of Eternity”)(l. 19)と見られるようになるが，すでに初期の段階に於て「混沌と荒廃」は「創造主」(“him who produced”)に結びつけられ，「恐ろしい崇高」(“terrible majesty”)として認識されている。この崇高は，*A Guide through the District of the Lakes* にある次のような崇高の説明と一致している。

> Subilimity is the result of Nature's first great dealings with the superficies of the earth : but the general tendency of her subsequent operation is towards the production of beauty ; by a multiplicity of symmetrical parts uniting in a consistent whole.[6]

「崇高は，大地の表面への自然の原初の御業の結果である」(“Sublimity is the result of Nature's first great dealings with the superficies of the earth”)と彼は述べている。ひとことで言えば，崇高は原始状態である。「混沌と荒廃」の風景もまた原始状態であるといえる。ここで注意せねばならないことは，崇高即原始状態，または崇高即「混沌と荒廃」とは必ずしも言えないということである。峠についての手紙の言葉も *Guide* の言葉も共に「創造主」(手紙では “him” と述べられ，*Guide* では “Nature” と述べられている)に触れている点を忘れてはならない。「部分」を「全体感」をもって見つめる全体的視点があるから，「詩心」の働きがあるから，「混沌と荒廃」や原始状態が崇高となりうるのである。そしてそのような「混沌と荒廃」から崇高へという質的転換こそ「詩心」の最高の働きであり，そこに出現する崇高は最もワーズワスらしい崇高である。

この崇高な自然に面して働く「詩心」は「詩心」の働きの原型ともいうべきもので，それはワーズワスの崇高な人物に於ても見られる。自然の「混沌と荒廃」や原始状態は，この世の存在の持つ temporal な性質が最も顕著に出たものである。ワーズワスには同じように temporal な性質が顕著に出た人物が現れる。

III

ワーズワスの崇高な人物の原型は，彼が少年の頃に出会った羊飼いである。羊飼いは二面を備えている。第一面は少年を最も魅了した要素であり，崇高な人物の原型となった，自然の中に於ける崇高な姿である。少年の眼に羊飼いは，「自由人」(“a Freeman”)(*Pr.* VIII, 387)，「王侯であり支配者(“a Lord and Master”)または神性(“a Power”)」(l. 393)や「守り神」(“Genius”)(l. 394)に見え，「巨人」(“a giant”)(l. 400)，そして「十字架」(“Cross”)(l. 409)に見えた。自然によって「外面的に崇高にされた人間」(“Man / Ennobled ontwardly”)(ll. 410-411)としての羊飼いは，詩人を「人間への無意識的な愛と尊敬の念」(“an unconscious love and reverence / Of human Nature”)(ll. 413-414)に導き，崇高な人物のイメージの原型として後々まで働きかけることになる。

第二面は，少年が当時気づいていたかもしれないが，正確には理解していなかった要素である。それはこの世に生きる存在としての羊飼いという一面である。ワーズワスの羊飼いは平和な牧歌的世界の住人ではなく，冬になれば嵐に仕えなければならない，厳しい現実に働き続ける人間である。彼は「最もありふれた人間」(“a Man / With the most common”)なのである。

> But, for the purposes of kind, a Man
> With the most common ; Husband, Father ;
> learn'd,
> Could teach, admonish, suffer'd with the rest
> From vice and folly, wretchedness and fear ;
> Of this I little saw, car'd less for it,
> But something must have felt.
> (*The Prelude*, VIII, 423-428)

当時の少年にとって関心があったのは，この「最もありふれた人間」としての面よりも「巨人」のような崇高な姿という面であった。しかし成長するにつれ，人間の mortality に対して目が開けてくるに従い，詩人の関心

は，この第二面に重心が移り，mortality を持つ，この世に生きる人間としての面に，第一面の崇高な姿を重ね合わせる方向に向かう。

"Michael" に於ける羊飼い，Michael は，この二面が備わった崇高な羊飼いである。Michael に於て二つの要素は切り離せないが，その崇高は，この世に生きる者を襲う不幸という第二面の内に，依然として保たれる第一面から生じると言える。Michael は，詩人が少年の時に出会った羊飼いそのままの逞しい羊飼いである。

Upon the forest-side in Grasmere Vale
There dwelt a Shepherd, Michael was his name ;
An old man, stout of heart, and strong of limb.
His bodily frame had been from youth to age
Of an unusual strength : his mind was keen,
Intense, and frugal, apt for all affairs,
And in his shepherd's calling he was prompt
And watchful more than ordinary men.
("Michael", 11.40-47)

若い時からの並はずれて頑丈な体格は年老いても保たれる。この自然と一体となって生きる有能な老羊飼いに一人息子が出来た。異常な程の愛を傾けて育てた息子を，彼は甥の借金の肩代わりのためにロンドンに稼ぎにやらせたところ，息子は堕落して姿を消してしまった。そのような悲しみがあっても相変わらず Michael は堂々とした体を運び，働き続ける。石一つ持ちあげられなくなるまで働き続け，死んでしまうのである。詩人は，Michael の忍耐の支えを愛に見出している。

There is a comfort in the strength of love ;
'Twill make a thing endurable, which else
Would overset the brain, or break the heart :
("Michael", 11.448-450)

愛によって Michael は不幸という「部分」を「全体感」とともに見つめることができたのであろう。Michael にも「詩心」があったと言える。それは詩人の「詩心」でもあり，我々はそれを共有するとともに Michael に崇高を感じるのである。

Michael は羊飼いの持つ二面をともに持っていた。それに対し，一面を，それも崇高性の乏しい第二面のみを持ちながら崇高感を与える人物がいる。 "Resolution and Independence" の蛭取りの老人("a Leech-gatherer")である。Michael も老人であったが，若い頃と変わらぬ頑丈な体格を持ち，自然の中に逞しく生きる羊飼いであった。蛭取りの老人は，「生きているとも死んでいるとも眠っているともつかない」"not all alive nor dead, / Nor all asleep")(ll. 64-65)，体の二重に曲がった老人である。羊飼いの持つ第二面を突きつめて言えば，それは mortality である。この蛭取りの老人は mortality の極致を示している。この人物像は，ワーズワスの創造物の一典型である。これに属する人物に，*The Prelude* の兵士(" a Soldier")やロンドンの盲目の乞食("a blind Beggar")がいる。

兵士は，詩人が青年の頃，夜の散歩で出会った人物で，幽霊と見まちがえる程の異様な姿をし，道標に支えられて硬直したまま，時々，死んでいるような苦痛と不安のか細い声を漏らす。そして盲目の乞食は，ロンドンの喧騒の中で行きあった乞食であった。壁にもたれて胸に自分の履歴を書いてぶらさげていたのである。この二人も突きつめて言えば，mortality の極致の人物達である。しかし兵士は詩人に連れていかれた家の前で，「私は天の神と行き交う人の目を信じています」("my trust is in the God of Heaven / And in the eye of him that passes me." (*Pr.* IV, 494-495)と言い，乞食を見て詩人は，「その不動の人の姿，固定した顔や見えぬ目を，あたかも別の世界から警告されているかのように見つめた」("on the shape of the unmoving man, / His fixed face and sightless eyes, I look'd / As if admonish'd from another world." (*Pr.* VIII, 620-622)のである。兵士のうちに，苦境の中でもそれを「全体感」とともに見つめる「詩心」が働き，乞食を見た詩人にも「詩心」を見出すことができる。

蛭取りの老人にも「詩心」がある。詩人は異様な姿をした老人と話しながら，その「不屈の心，独立心，忍耐，そして倫理的威厳」("the fortitude, independence, persevering spirit, and the general moral dignity")[7]にうたれ，"Resolution and Independence" の末尾を，「神よ，しっかりと私の支えになって下さい。私は淋しい沼地の蛭取りを思い出しましょう」("God . . . be my help and stay secure ; / I'll think of the Leech-gatherer on the lonely moor!" (ll.139-140)と締めくくっている。そして注目せざるをえないのは，詩人の目に映じた老人の異様な姿そのものについての次のような double simile である。

As a huge stone is sometimes seen to lie
Couched on the bald top of an eminence.
Wonder to all who do the same espy,
By what means it could thither come, and
whence ;

So that it seems a thing endued with sense:
Like a sea-beast crawled forth, that on a shelf
Of rock or sand reposeth, there to sun itself;
("Resolution and Independence" 11.57-63)

ここで老人は「巨大な岩」("a huge stone")に，「海獣」("a sea-beast")に譬えられている。老人について1802年6月14日のSara Hutchinsonへの手紙の中で，ワーズワスは次のように書いている。

A person reading this pome with feelings like mine will have been awed and controuled, expecting almost something spiritual or super -natural- what is brought forward? A lonely place, a Pond 'by which an old man *was*, far from all house or home" -not stood, not sat, but 'was' -the figure presented in the most naked simplicity possible. This feeling of spirituality or supernaturalness . . . [8]

詩人の説明によれば，老人は超自然的存在である。確かに異様な姿であるが，その超自然性は自然性（言い換えればmortality)の極致の別称である。老人は，以前に触れた「混沌と荒廃」や原始状態にも等しい存在である。しかしそのmortalityが顕著な姿に我々は「崇高なるもの」を，immortalityの「潜在感」を感じることができる。そのような印象を我々に与えるように描いた詩人の「詩心」には，恐らくあの羊飼いの崇高な姿が重ね合わされているのだと思う。

そして忘れてならないのは，このような老人に崇高を見出すように詩人自身を導いた原動力の存在である。それは詩人の自我の危機的状態である。老人と出会う前，詩人は自分の身の破滅ということに悩んでいる。その悩みの答えとして，蛭取りの老人が現れるのである。詩人に危機意識がなければ，蛭取りの老人にこれほどの感銘を受けることもなかったのではないかと思われる。そして「詩心」の働くこともなかったであろうと思われる。

次に，このmortalityより生じる自我の危機と「詩心」との関係に関してシェイクスピアのLear王に触れておきたい。

IV

これまで述べてきた「詩心」をSatanも持っている。ミルトンの*Paradise Lost*[4]のSatanは神に戦いを挑んで敗れ，地獄に落ちる。地獄を自分の支配地とし，更に神への挑戦を考える。その彼が，「地獄から天国を，天国から地獄を造ることさえできる」("make a Heav'n of Hell, a Hell of Heav'n")(I,255)と考えている。彼に従う天使の一人も次のようなことを言う。

Our greatness will appear
Then most conspicuous, when great things of small,
Useful of hurtful, prosperous of adverse
We can create, and in what place so e're
Thrive under evil, and work ease out of pain
Through labour and endurance.
(*Paradise Lost,* II,257-262)

「卑小なるものから崇高なるものを造り出し，害するものから有益なものを造り，逆境から順境を造り出す時」("When great things of small / Useful of hurtful, prosperous of adverse")，彼らの「崇高が際立って現れる」("greatness will appear / Then most conspicuous")と言う。ここには「詩心」の働きが見事に述べられている。しかしワーズワスの人物達との間に決定的な違いがある。Satan等は神にそむき，ワーズワスの人物達は神の方向を向いている。「詩心」の作用は同じであるが，その根底となるものが違う。人間に於て，Satanの方向をとらせるものは傲慢であり，その野望を砕くのは人間の持つmortalityである。傲慢によって真実を見失い，mortalityの自覚によって真実に目覚る例としてLear王があげられる。

King Lear[10]は，「私は万能だ」("I was everything")(4. 6. 104)という自己認識から，「私は一人の哀れな年寄でございます」("a poor old man")(2. 4. 268)という自己認識に至る変化，そしてその変化に付随する，「無から生ずる物は無だけだぞ」("Nothing will come of nothing")(1. 1. 89)という合理主義的認識から，「無」に「有」を認識するに至る変化，という二つのLearの変化を扱っている。「無」に「有」を見る働きは，「卑小」に「崇高」を見る「詩心」の働きと同じであり，Learはこの「詩心」を持つに至るとも言える。そしてそのような「詩心」を持つには，自身のmortalityについての目覚めが必要である。それを端的に示すのは，Learの「我々の必要というのは不思議な魔術だぞ，それを用いると下らぬ物が貴いものに笑えてくる」("The art of our necessities is strong, / And can make vile things precious")(3. 2. 70-71)という言葉である。「何もございません」("Nothing")(1. 1. 86)というCorderiaの言葉に言葉以上のものを認識することが出来ず，彼女を追放した後，無に等しい孝心の言葉を吐いたGoneriloや

Regan に追放され，嵐の中，荒野にさ迷う時に口にした言葉である。Lear の mortality についての自覚は次のようにも述べられている。

. . . . When the rain came to wet
me once and the wind to make me chatter, when
the thunder would not peace at my bidding, there
I found
'em' there I smelt 'em out' Go to, they are not men
o'
their words : they told me I was every thing ; 'tis
a lie–
I am not ague-proof.
(4. 6. 100-105)

嵐の中で，Lear は自分の無力を自覚した。雷に「静まれっ」と言ってもいうことをきかない。Goneril や Regan は，「御自分のことはあまりおわかりじゃない」("he hath ever but slenderly known himself.")(1. 1. 290-291) と思いながら，Lear の言うままに従い，Lear に自分は万能であると思わせ，「自然」に命令を下す程の傲慢さと無知を植えつけたが，Lear はすべてが嘘であったことに気づいた。彼は「瘧(おこり)」("ague")をどうすることもできないのである。そのような mortality の自覚から次のような同情心が生まれてくる。

Poor naked wretches, whereso'er you are,
That bide the pelting of this pitiless storm,
How shall your houseless heads and unfed sides.
Your loop'd and window'd raggedness, defend
you
From seasons such as these? O! I have ta'en
Too little care of this. Take physic, Pomp ;
Expose thyself to feel what wretches feel,
That thou mayst shake the superflux to them,
And show the Heauens more just.
(3. 4. 28-36)

Lear は，「貧乏で着る物もない気の毒な人達」("poor naked wretches")の身を案じ，かっての自分がそのような人々に不注意であったと反省している。このような認識は，彼が「裸の二本足の動物」("a poor, bare, forked animal")(3. 4. 107-108)になり，阿保以下の「無」("nothing")(1. 4. 194)になることによって切実に人間の mortality を味わったから得られたのである。かって Lear に見棄てられた Cordelia に対して King of France は，「コーディーリァ，あなたは貧しくなって最も豊かになり，棄てられて最も好ましく，ないがしろにされて最もいとおしいものになった」("Fairest Cordelia, that art most, rich, being poor ; / Most choice, forsaken, and most lov'd, despis'd!")(1. 1. 249-250) と言ったが，この「詩心」と同じ働きの「詩心」を Lear も得るに至り，Codelia の「無」に「有」を発見するに至る。*King Lear* 末尾の Cordelia の死，そして Lear の死は悲痛である。しかし崇高という面では，mortality の極の死は二人の「崇高が際立って現れる」時であるとも言える。

V

Satan の例にも見られるように「詩心」には悪魔性がある。その悪魔性を抑制するのが，mortality である。ワーズワスの「詩心」も mortality と深く関わっている。ワーズワスは自我の詩人とよく言われるが，彼は "wise passiveness" の主張以来，合理主義的分析理性に代表される表層の自我の否定に努め，他者とも思えるような深層の自我の発見に努めた。その深層の自我と「詩心」との究極的な関係は次の言葉に示されている。

. . . alternations proceeding from, and governed by, a sublime censciousness of the soul in her own mighty and almost divine powers.[11]

「詩心」の働き（想像力の変質作用と呼んでもよい）は，「魂の自身の強力で神聖な能力についての崇高な自意識」から生じる。この「魂」が深層の自我であり，そこからの働きを得るためには，Lear の狂気のような表層の自我の否定が必要であり，その否定の力こそ mortality なのである。mortality の否定の力が，人物を異様な姿に見せる程窮まるにつれ，否定し尽くせぬ気高い精神が「際立って現れる」のである。ワーズワスの崇高な人物や Lear にはその働きが認められる。

注

1. *The Prelude* は Selincourt 編，1805年版を使用。尚，他のワーズワスの詩編は Oxford Standard Authors の Selincourt 編，*Wordsworth Poetical Works* から引用した。
2. *The Porse Works of W. Wordsworth,* ed. W. J. B. Owen and J. W. Smyser (Oxford Univ. Press, 1974), II.349.
3. *Loc. cit.*
4. Mary Moorman, *W. Wordsworth : Biography-The*

Early Years 1770-1803 (Oxford Univ. Press,1957), p.141.

5. *The Letters of W. and D. Wordsworth : The Early Yarly Years,* ed. E. D. Selincourt, rev. C. L. Shaver (Oxford Univ. Press, 1957), p.34.
6. *Prose Works,* II. 367.
7. *Letter,* II, 367.
9. 引用はOxford Standard AuthorsのD. Bush編, *Milton Poetical Works* による。
10. 引用はJ. D. Wilson編, The New Cambridge Shakespeare の *King Lear* による。
11. *Prose Works,* III, 33.

(受理　昭和56年1月16日)